

イオム

ANARKISMO K. LITERATURO 1033

ENHAVO

労働に関する断章・その2

労働と自由 日野善太郎 1

〈詩〉風景 山口 英 12

ある疑問のとばくち

—中本弥三郎氏のことから— 寺島 珠雄 14

〈雑記〉 21

河本 乾次・高島 洋・和田 栄太郎

杉藤 二郎・戸田 広介・平山 房子

〈イオム〉5号・合評会の記 38

江西一三とその時代 (3・完)

向井 孝 40

N-10. **6**

SPT.1974

イオム6号 1974・9 ¥200

発行 イオムの会
神戸市葺合区熊内町1丁目5-3 前田 幸長
印刷 イカロス工房

労働と自由

日野善太郎

(1)

労働とは何かということを原義的に考えてみたい。その為には貨幣経済下での職業という概念を、一度棄て、考えた方が本質に近く捷徑だろう。(職業について、労働と職業の関係については前回に少しふれたが、後に改めて我々はこの問題と再会せねばならないだろう。しかし、今は順序として、労働とは何かについて、それを職業と切り離して、より本質的に考えねばならない)

労働とは何か、ということを原義的に考えるということは、労働をその最も素朴な形で捉えるということである。人間の生活をその最も原始的な姿で想像することである。

原始、人間の生活がどんな風であったかを我々は、当

然、肉眼で見るとは不可能である。微細な点まで余す処なく想像することも不可能である。しかし、おおよそのことは想像することが出来る。これから考えようとしていることの手がかりとしては、それで十分な筈である。

背椎動物門哺乳綱霊長目ひと科に属する生物が、はじめて地球上に出現したとき、人間と猿との間にどれだけ差があったのか、我々は知ることが出来ない。同じく霊長目に属する人と猿とが、いつ、どんな風にして、人と猿とに別れたのかも知ることが出来ない。たゞ、我々は人と猿とが別なものであることを知っており、その相違点を指摘することが出来る。

すなわち、我々が人間の原始的生活を考えるというときの間とは、猿とはっきり区別され、また我々が猿人

とか原人とか称んでいる、それより後の人間を指しているのである。

我々の先祖たちが、天然の洞穴や樹の上などに棲み、果実などを採取して生きていたころ、彼らは猿とも人も区別が出来なかつたであろう。けれども人間は、やがて農耕を知り、火の使い方をおぼえ、寒さから身を守るための衣服を發明し、草木や石などによって彼自身のために住居を築造するようになり、はじめて彼が他の生物とは異なる人間であることを主張出来るようになった。何十萬年以前のことか、何百萬年昔の話か私は知らない。

そして、そのときから労働が始まった。言い替えるなら、労働することによって、人間は人間以外の生物と違うことが出来た。なるほど、生物と名のつくかぎりの生物はすべて生きるための本能を持っているだろう。だが人間以外の生物は、与えられた条件（自然）以上の生き方はしない。生長し増殖することも条件が具備しなければ終ってしまう。

日照りが続いて、池の水が干上れば、池の魚は死ぬだろう。同じように草原が砂漠に変れば、鳥も獣も亡びるだろう。

人間もまた、その生存を保証する条件が悪くなれば生き残ることは出来ない。それは他の生物と同じだ。違う

なかつた筈だ。欲しい物は自分で作らねばならない。自分で作れなければ無くて不便でも我慢しなければならぬ。我慢出来ないもの、彼の生活に絶対必要なものならば、下手でも、不恰好でも、自分で作らねばならない。それには自分の身体を動かさねばならない。作ることを考えたとか、作る方法を知っている、というだけでは何にもならない。魚は生で食べる方がうまい、と思つたらそれでもいゝが、焼いた方がうまい、と思つたら火をおこさねばならぬし、石を積んで炉を作らねばならない。

原始、人間にとって労働は生存の必要だつた。そして、労働とは彼自身の肉体を動かして何かを作り出すことだつた。「だつた」と書いたけれど、この定義は現代でも変らない。「だつた」でなくて、「である」というべきであろう。

つい数年前のことだが、何かのデモの帰りに、お互いの家と同じ方向だつたので、或る若い友人と連れになつた。友人はまだ二十代の初めぐらいの年令で、社会とか人生とか、革命とか、政治とか、哲学とか、そういうことに強い関心を持ち、若者らしい一途さで思いつめていた。観念世界での彼の思索に結着をつきたいとあせっているようでもあつた。彼なりの思索の結果を、せきこむような語調で私にぶちまけた。

のは、その条件を与えられるまゝに受取るのではなくて、彼の生存の為に可能な限り積極的に条件を変えようと試みることだ。或いは必要な条件を作り出すことだ。

天然の洞穴を探し求めるのではなく、木石を加工して住居をつくる。自然の果実をもぐのではなく、それを栽培する。そこに当然、労働という行為がある。人は獣のような毛皮を持っていない。寒さから身を守るために衣服が必要だ。人は魚のように泳げない。川を渡るためには、橋か、舟が必要だ。労働は人間にとって必要そのものである。

原始、人間は精々家族単位のごく小規模の社会しか持たなかつたろう。交通交流はなくて、彼はつねに孤立して生活しなければならなかつたであろう。とすれば、彼は彼の衣食住を他人の生産に依存することは出来なかつた筈だ。彼は彼の住む家、彼の食べる物、彼の着る衣服を彼自身の手で作らねばならなかつた筈だ。それは、欲しいと思う物をただ想像するだけでなく彼自身が肉体を動かすことではなければならない。欲しいと思う物を誰かに作って貰おうというわけにはいかない。その「誰か」がないのだ。

買物籠をぶらさげて、一寸スーパーへ行けば、たいがい物は手に入る、というわけには、原始の人間はいか

「現代では」と彼は言った。「人は働かないことが美德だと思ふんです。働く人間は醜悪ではないでしょうか」

若い友人が何を言いたいのか、私には判るような気がした。が、すぐには同意を与えなかつた。

「はほう、それはまた何故かね」

「資本主義の下で働くことは、好むと好まざるとにかかわらず、資本に奉仕することになるでしょう。資本主義の利潤追求は、機関銃やナパーム弾を売りまくったり、有害食品をばらまいたりして恥としないでしょう。働くことはエコノミック・アニマルの商品を公害と一緒に生産することじゃないですか。人間はもつと自然にかえる必要があるんじゃないでしょうか」

「成程、君のいう通りだねえ」

「そうでしょう。だからぼくは会社をやめようと思ふんです。そしてもう一生働かずに、どこにも就職せず放浪しながら生きようと思つています」

私鉄の駅を出て、肩を並べて歩きながらの会話である。友人はもつとたくさん言葉を並べたのだが、粗っぽく要約すると右のようなことを、若者らしい舌足らずな表現と熱心な一途さで語つた。

その会話の少し前に電車の中で、私は「労働者にとつての反戦とは、兵器の輸送と生産の拒否なのだ」という

ことを友人を相手に熱っぽく語った。それに彼は触発される処があつて、彼がつねづね思っていることを、こうして語り出したのだ。彼には、もしかするとヒッピーの影響もあつたかもしれない。

「君はそういう考えを正しいと思つてる？」

「勿論ですよ」

「自分がそう考え、それを実行するだけでなく人にもすゝめるわけ？」

「それは判りません。でも、どちらかと言えばそうするのが正しいと思います」

「働かないってことは、絶対に何ももしないってこと？」

「生産的なことはやらない？」

「そうです。乞食とか、雲水とかのように」

「じゃ、君が正しいと思つて実行しようとしていることは、君が悪いと思つていることを他人にやらせるわけだ？」

「？？」

「だつてそうだろう。君は働くことは悪いことだと思つている。絶対に働かないという。すると、君の食べる物、着る物、住む家は誰がつくるのかね。乞食になろうとしている君には、住む家はいらぬかもしれないが、それでも泊めてくれる家があれば泊るだろ。そういうものを誰がつくらなければならぬわけだ。つまり、君は君の

思想の最善の実現として働かないことを選ぶ。そのかわり、君の思想が最も悪なるものとする労働、生産を誰かが君の為にしなければならぬ。その人は特別に君の為にと思つてするわけじゃないだろうが、君が絶対に働かないで生きて行こうとすれば、結果としてそういうことになる。君が君の最も善なるものを実現しようとする、誰かがその分だけ悪を行う。矛盾だね」

若い友人は考えこんでしまった。

それからその会話がどう続いたか記憶がない。たぶん、別れるべき町角まで来てしまったので、それきりになつてしまつたのではなかつたらうか。

私は友人の意見に百%反対ではなかつた。現実の生産関係、資本主義を憎む気持は彼に劣らぬほどあつて、そういう中で労働を拒否したい、という気持だつて確かにあるのだ。

兵器工場なんかは勿論、あらゆる公害工場をぶっこわしてやりたいと思う。今の世の中ではどんな職業についても、資本に奉仕することになるから何もやりたくないとも思うのだ。やりたいことをやり、やりたくないことは絶対やらない、ということはいふことだ。だが私は少々理屈っぽい人間なので、簡単にはそうならないのだ。理屈っぽいとは不自由なことだ。

どんな世の中であろうと、労働は人間にとっての必要なのだ。生きることをあきらめた人間は別として。と言うことは絶対的眞実であるけれども、労働が搾取の対象であり、それが資本の支配によって醜悪な道具に替えられ、益々資本を強めているということも事実なのだ。私はそのところをもう少し、友人と話しあうべきだつた。どうしたら労働が「私」自身のものとなるかについて。

(2)

どうしたら労働が「私」自身のものとなるかについて考えるために、私は自由について語らねばならない。自由について考えることは、労働とは何か、ということを含んで考えてきたことと別の面から考えることであるからだ。

自由、とは次に述べるようなものだ、と私は考えている。

すなわち、自由とは人間の本然のものである。与えられたものでなく、借りてきたものでなく、新しく創るものでなく、人間であるということが、そのまま自由なのだ。

自由とは、そういうものだと思う。

或る束縛から逃れようとする意思、または行為の名が自由ではない。自由は歪められたり、押し潰されたり、

束縛されたり、支配されたりするものであるが、それはそうなる以前からあるのであつて、そうなつたことから逃亡しようとし、逃亡したときに生まれてくるものではない。人間の存在——実存そのものが自由なのだ。

人間の存在、こゝに「私」が生きているということは、どう考えても「私」だけのことであつて、この「私」の生命は、他人から与えられたものでも、借りたものでもない「私」なのである。

「私」は「私」を生きているのであつて、他人を生きているのではない。判り切つたことである。「私」が「私」を生きているということ、善も悪も「私」が選び、「私」を律するもの「私」自身であるということ、これが自由である。それは至極当たり前のことであつて、改めて言うことがおかしい位である。

くだいようだが、もう一度、言葉をかえていうならば、人は自由でありたい為に自由なのではなく、自由が必要だから自由なのでもない。もともと自由なのだから自由なのだ。

人はみな「私」の肉体と精神とを「私有」している。

こればかりは他人から借りたり、奪つたり出来るものではない。「私」は「私」の肉体と精神を好きなように使うことができる。誰に気兼ねも遠慮もいらぬ。自由な

のだ。そうして、人が「私有」出来るものはこれだけなのである。これ以外の何物も「私有」することは出来ない。

「私」の肉体と精神以外のものは、すべて「他有」であるか「共有」であるかのどちらかである。「私」から出て行ったものも「私」のものではない。「私」が考えた、空想したりしているとき、その思考や空想はまぎれもなく「私」のものであるが、それに形が与えられて、たとえば絵画や文学作品として実現したとき、それは他者の鑑賞と批判にゆだねられるべきもの、他者の意識にとり入れられるべきもの、すなわち「共有」のものとなる。しかも「私」は「私」の思考や空想をどんな風に実現してもいい筈である。つまり、それが自由だ。

労働についてもそれは言える。「私」が作ろうとするものが、米であるか、ビルディングであるかは私が決定すべきである。何かを作ろうと思うこと、そのこと自体が自由なのである。作る為の行為、労働も、その故に自由である。「私」が「私」の肉体を使って働くのだから、そのこと自体が自由である。同時に労働は「私」の意識の外へ出て、他者の目にふれる行為であるという点で「私有」でありながら「共有」でもあるという二面性を持っている。労働は「私」自身の肉体をもって「私」が行な

うのだから「私」のものである。けれどもそれは、肉体という物を通して可視的に実現されるが故に、他者の批判にさらされ得るものである。

自由は人間の本来であり「私」のものであるけれど、それはつねに他者の批判を拒絶することが出来ない。他者の側の「私」によって言うならば、批判は「私」の自由である。批判の対象とされた者が、それを受容すると否とにかかわらず自由である。

このことは、労働について言えるばかりでなく、労働の結果についても言えることだ。たとえそれが「私」自身の用に帰するためにつくられたものであっても、本質的には少しも変らない。しかも、いくら可視的ではあっても、瞬間ごとに消えて行き、それが終わったときには完全に消滅してしまふ労働という行為とは違って、労働が完了したときに完成した姿を物質として実現する生産物は、その使用を他者にゆだねることも出来る、という点で労働と質を異にしている。

だから、誰かに頼まれ「私」が製作を引き受けてブロック塀を作ったと仮定すると、その製作の途中での労働一切は、誰が何と言おうと「私」のものである。ひろん、その労働は依頼者や第三者の批判にさらされながら進行する筈であるが、その労働が「私」のものであることに

変りはない。けれども出来上ったブロック塀は、「私」のものではなく、依頼者のものである。

が、果してブロック塀は依頼者の私有に帰することが出来るだろうか。頼んで製作して貰ったのだから私のもの、と言う当然すぎるような考えに疑問をはさむ余地はないだろうか。

家の中の様子を他者の視線から守るため、風を防ぐため、他者の侵入をさえぎるため、などが一般常識的にブロック塀（に限らず塀と名づけられるものすべて）の目的であるならば、それはまったく私的な用途であって、そこに他者の介在、介入はまったく許されないと我々は思う可きだろうか。

答は否である。

まずブロック塀の位置、形状、高さなどについて他者はそれを批判することが出来る。カーブの見通しが悪くなって自動車の運転に不都合で事故が起り易いか、隣地との境界を何センチ侵しているとか、陽当りが悪くなくて洗濯物の干し場に困るとか、その形が猥雑で見るに耐えないとか、工事が拙劣で何時倒れるか判らないから不安だとか、実用的な事柄から、非実用的な事柄まで、正当な指適から杞憂にすぎないことまで、様々な批判が出て来ても不思議ではない。この意味でブロック塀は共

有されている。

また、例の依頼者は未来永劫、このブロック塀に囲まれた家に棲むことが出来るだろうか。そんなことは誰にも判らない。彼は何らかの事情で転居しなければならなくなるかも知れない。ブロック塀が完成した直後に事故死するかも知れない。不慮の死とかアクシデントばかりを言わなくても、人間の生命には限りがある。しかも、彼が所有を放棄せざるを得なくなった後にもブロック塀は残るとすれば、その後の所有者は誰なのか。

「起きて半畳、寝て一畳、天下取っても二合半」なのである。人の生存に最少限だけだけの「物」が必要か、突きつめて考えてゆけば、ごく僅かなものしか残らない筈だ。ロビンソン・クルソーを見よ。マーメイド号を見よ。横井庄一を見よ。小野田寛郎を見よ。である。

ブロック塀は、あった方がよいかも知れないがなくても差しつかえないかもしれないのだ。それならば、それはどうしても私有されねばならないものではないことになる。まして、その所有が「私」から他へ移動する可能性を包みながら存在するのであれば、その所有は、絶対の私有ということにはならない筈である。そうは言えない筈である。

用語の適、不適は別として、私は所有の形態を次の三

つに区別したいと思う。いわく、私有、専有、共有の三つである。

私有とは絶対に所有の形を変更出来ないことでなければならぬ。「私」以外の誰の所有にも属することの出来ない所有形態である。したがって、人はその精神（意識）と肉体以外の何物も私有することは出来ない。（行為は肉体と意識に属するものである）

専有とは所有の形を変更出来ることをさしている。今日「私」のものであっても、明日は他人のものになり得るものは、私有しているのでなくて、専有しているにすぎない。たとえば、私有財産と称されているものは、仮に私有と名づけられているだけで、専有と言った方が事実に近いと思う。この世の約束だの、しきたりだののために専用を認められているだけで、絶対的に私有を主張出来るものなんて「私」の意識と肉体以外にある筈がないのだ。

共有とは私有の反対語である。たとえば、地球は誰のものか。誰のものでもない。誰の私有にも属さない。しかし、誰のものでもないということは誰にも使用权がない、ということになる。誰のものでもないものは、明快にみんなのものだ。みんなとは人類全体である。それならば、それは共有というべきであろう。私有に属さぬ事

もう少し辛抱してつきあっていたきたい。本質論とは元々現実離れた退屈なものなのだ。だが、この文章を先へすすめるためには、どうしても通らねばならない道順なのだ。

さて、労働とは何か、を考えるのが今回の目的だった。以下はなるべく結論を急ぐことにしよう。

これまでに考えたことを念のために要約すれば次のようになる。

労働は人間の生存に絶対的に必要な行為である。それは彼の肉体を通して行なわれる故に私有のものである。すなわち自由である。それは可視的な事象である故に他者の批判にさらされる。つまり、私有の事象でありながら共有の側面を持つている。他者の批判を拒絶する自由はない（反論や無視は可能だが）という意味でも、労働は自由と不可分なものである。

労働のそういう性質より更に、労働の結果である物象（生産物）は共有の色をこくしてくる。というより、生産物は「私」から離れて共有にゆだねられると言った方が正しい。

つけ加えるならば、以上の他に、労働の効用的側面を考慮しておかねばならない。それは労働によって作り出されるものは、その当事者が必要とする量を超えること

物はすべて共有のものと考えるべきである。私有財産と称されているものも、実は共有の事物を、誰かが掠めて私有を主張しているにすぎない。当然、返済されるべきである。

この論理で考えれば、私のパンツは元来は共有のものを、仮に私が専用しているにすぎない。が、パンツは使用不能になるまで専用しても構わないだろう。専用は私有とは違うけれど、専有でなければならぬ条件の事物が人間の生存には必要なのだ。

では、人間には何と何の専有が許されるだろうか。基本的には彼の生存に必要なだけの衣食住である。それは今、抽象的にそう言うしかない。何がどれだけ、と具体的に質量を数字で現すことが困難だからである。

しかしながら、人は彼に不必要な質量を他人の専有を侵してまで、専有するいわれはない筈である。一人が十人分の衣食住を持ち、他の何人かが半人分ずつ持つということがあってよい筈はない。また、大食漢が平均の二人分の食糧を、少食者が平均の半分の食糧をということになっても咎められるべきではない。専有とは、そういうものである。

退屈で、現実離れた記述が、くだくだしく続くので、読者は今、疲れを感じているかもしれない。けれども、

が出来るということだ。「私」は夏服を二着しか必要としない。にもかゝらず、五着の夏服を製作し得るということだ。労働のこういう性質は、現実の問題を考える最初の手がかりとなるであろう。

原始、人間はごく素朴な道具（或いはその原形）しか持たなかった。生産物はごく少く彼自身の生存にやっと足りる程度だった。だがその道具が改善されると、人は彼の生存に必要な量を残して、なお余るような生産物を得るようになった。野生の果物を採取して生きていた時代より、農業栽培によって生活するようになった時代の方が、はるかに豊かで堅実な暮しとなった。

人は彼の生産物を他の誰かの別な生産物と交換することが出来るようになった。一方では、その生活する場所の立地条件や、個人の能力に応じて、夫々の得意な生産にしたがうようになった。生産物の交換のための交通も次第に開けるようになった。人は、彼自身の生存の為に必要なものの何かもを、彼自身の手で作らなくともよいようになった。その頃から人による支配、搾取が始まった。

人がまだ野生の果物を採取することで食糧を得ていた時代、そういう時代にも縄張り争いめいた事はあったであろう。しかし、そうすることでの利益は少かったに違

いない。それよりも共同して人間にとつての外敵、野獸と闘うことの方が価値ある行動であつたであらう。

人の労働が、彼自身の生存に必要なぎりぎりを生み出すにすぎなかつた時代には、人が人を支配することは無意味だつたらう。威嚇して奪う、傷つけたり、殺したりして奪うということはあつても、それより共同の労働によつて相互に豊かになる方が、はるかに理にかなつていたのであらう。しかし、労働が彼の必要を超えて生産するようになったとき、その超える部分を絶えず奪い続けようとする者が出て来たに違いない。鳥けものに向けられていた弓が人にも向けられるようになったであらう。かつては、体力と智力に秀れた者が強者であり、共同体の中で弱者をかばい、共同の作業の中心であつた。やがて、強者とは個人の能力によるものでなく、人と物とを多く支配する者の名になつた。生産物ばかりでなく、労働そのものを奪う者が強者なのである。

労働を奪うとは、強制によつて人を働かせることである。簡単に言うならば、人を奴隷にすることである。自由を奪う事である。前にも述べたように、労働とは元来私有のものである。それを奪うことは自由を奪うことだ。そうして生産物は共有のものだ。だが共有のものは、特定の個人の専有ということとは勿論違ふ。強者と

は、こゝでは掠奪者のことであり、掠奪者とは他の自由を奪うことである。

そして我々は歴史の中に、掠奪者がその強大な力に物を言わせて、人間社会の仕組みを彼の掠奪に都合がいゝように編成替えして行くのを見ることが出来る。国家の形成だ。国家とは掠奪と支配のための装置だ。いかなる名辭を冠しよう、国家のあるところに自由はない。

やがて国家は、その掠奪を容易にするために貨幣を發明する。それは經濟の流通を単純化したけれど、同時に本来は価値なき貨幣に虚構の価値を与えて、人間を錯誤の泥沼に導いて行つた。

貨幣とは虚構の価値の実現形態である。国家があくまでも虚構としてしか存在しないのに対し、これは虚構でありながら質量を持った物として存在する。国家は事象であるが、貨幣は物象である。その故に貨幣は、しばしばその存在の重さで国家をしのいでしまう。しかも、にもかゝらずそれは国家の存在の先行なしには存在し得ない。もともと虚構のものである貨幣が、或る価値の実現形態として通用するのは、国家の強制があるからである。

人は金貨を食べることも、着ることも、それによつて風雨を防ぐことも出来ない。金貨は物としては単なる金

属の小片にすぎない。人はたゞ契約によつて、金貨一枚は他の物象の定められた質量と等価値であると認める。その契約を保証するのは国家（権力）による強制だけだ。だから、それは殊更貴金属によつて作られなくても、国家の強制力が大きければ紙片で代用しても困らないのだ。

トレット・ペーパーの代用にもならないような小紙片が、たとえば一萬円札一枚が、人間一人を数日養うことが出来るという不思議は、そのからくりのためである。

ともあれ、人間の世の中に貨幣が出現して以来、労働は国家的強制以外に、売ったり買つたりの対象とされるようになった。そのために労働は、その本来の性質に別の性質を付加され複雑な性格を持つようになった。

更に、動力の發明とそれによる機械文明の發達がそれに拍車をかけることになつた。

労働の本質は次第に隠蔽され、その本質とは似て非なるものが本質であるかのように錯覚されるようになった。労働は人間の生存に必要な衣食住をつくり出す行為でなく、それによつて金銭を得る手段になつてしまつた。物を作り出すことと、金銭を得ることは、よく似ているように見えて丸で違ふのである。

売り渡した労働は「私」の労働ではない。他人のものとして行為される。だが、「私」の意識と肉体が「私」

から切り離されてしまふということはあり得ない。たゞ売買によつて生じた虚構を受け入れることによつてのみ、それが「私」のものでありながら「私」のものではない、と言ふことになるのだ。

労働の本質は少しも變つていないにかゝらず、人は受入れた虚構を本質に優先させてしまふ。労働の性質の複雑さとは、その辺のことである。

今回は、労働者とは何か、と言ふことについて考える予定だったが、それからはずれた処へ進んでしまつた。しかし、労働の本質について考えることは、労働者とは何かを考える為の前提として、一つの道順であることに相違はあるまい。今回は職業と労働について考えたいと思ふ。